

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 22 日現在

機関番号：30103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370456

研究課題名(和文) サハリン・アムール地域の言語地図

研究課題名(英文) Linguistic atlas of Sakhalin and Amur region

研究代表者

白石 英才 (Shiraishi, Hidetoshi)

札幌学院大学・経済学部・教授

研究者番号：10405631

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本プロジェクトの最大の目的であった、存命のニヴフ語話者に面会し音声データを直接得ることは概ね達成できた。この間、フィールドワークをロシア極東ハバロフスク管区およびサハリン州の複数地点で実施した(ハバロフスク、ニコラエフスク・ナ・アムール、アレーエフカ、チリヤー、ネクラソフカ、オハ、ノグリキ)。調査した話者は20名近くにのぼった。収集したデータは多岐にわたるが、当初予定していた1) 基礎語彙、2) 2音節語のアクセント分布、3) 動植物語彙については各地で集中的に採録し、均質なデータが得られた。それに加え、いくつかの方言については発話資料を集中的に採録できた。

研究成果の概要(英文)：Multiple fieldwork trips to the Russian Far East (Khabarovsk, Nikolaevsk-na-Amure, Aleevka, Okha, Nekrasovka, Nogliki) resulted in obtaining the following recordings; i) daily conversations among speakers of Nivkh, especially speakers of the Amur dialect and the Shmidt dialect, ii) basic vocabulary, accent patterns in disyllabic roots and words around the flora and fauna. In total, we could obtain sound recordings from nearly twenty speakers.

研究分野：言語学

キーワード：基礎語彙 アクセント分析 言語地図 母音調和 シュミット方言 舌根調和 動植物語彙 ニヴフ語

## 1. 研究開始当初の背景

日本列島以北の先住民族言語であるアイヌ語、ニヴフ語、ウイльта語は長年日口の研究者がそれぞれの立場から調査・研究を行い、大きな成果をあげてきた。その一方で、そうした従来の手法による調査は調査地点や採録データに著しい偏りが見られる。それは方言横断的に均質な基礎資料の欠落を招き、今日に至るまで言語地理学的手法による言語研究を困難にしている。また日口間の研究者間で連携が十分にとれていたとは言い難く、国際共同研究も限定的であった。その結果、この地域の言語研究の成果が国際的な研究の場(学界)において披瀝されることが少なく、それが新規研究者(特に若手)の参入を困難にする要因の一つとなっている。

## 2. 研究の目的

主たる調査対象言語であるニヴフ語の均質な基礎データ(基礎語彙、2音節語根アクセント)を方言横断的に採録し、言語地理学的手法による基礎研究(アクセント研究、母音音価測定ほか)を可能とするための基礎資料とする。またアイヌ語、ウイльта語との借用関係が推定される語彙(含む動植物語彙)については語形から借用の方向を推定の上、3言語間の接触の規模・様態・時期を探る。

ロシア側研究協力者と緊密に連携し、その成果を i) 国際学会で発表し、ii) インターネット上で公開することで新規研究者の参入を促す。

## 3. 研究の方法

ニヴフ語諸方言について、話者が存命であれば現地調査により基礎データを採録する。そうでない場合は文献から可能な限り同質のデータを抽出する。音声については母音の形質(F0、フォルマント、長さほか)を測定し、データベース化してサンプル音声と共にインターネット上で公開する。借用語についてもデータベース化の上、言語地図の形式で出力する。ロシア側研究者と緊密に連携し、研究成果を国内・国際学会にて発表する。また国内外の学術雑誌に成果を公表する。

## 4. 研究成果

基礎語彙、2音節語根についてはアムール川下流域(ロシア極東ハバロフスク管区)およびサハリン島(サハリン州)の複数地点において合計20名程度の話者から採録することができた。これにより従来の基礎語彙資料(例えば中川・佐藤・斉藤1993)を大幅に補完することが可能になった。現在、このデータを利用した言語地理学的手法による言語地図の作成に着手し、各種研究会で順次その成果を報告している(例えば東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究「アジア地理言語学」、代表:遠藤光暁青山学院大学教授)。

母音の音価測定にかんしては、アクセント研究と関連して、母音調和を音声学的に裏付ける成果をあげることができた。ニヴフ語の母音調和の一つに、2音節語根内で第1音節母音から第2音節に順行同化するタイプのものがある(Hattori 1962)。ニヴフ語の多音節語ではアクセントは常に第1音節にあるので、この母音調和にはアクセントが関係していることが推定される。ただし、母音調和にアクセントが関与する場合、2母音間の長さ比が大きすぎると母音調和環境が破壊され、母音調和が発生しにくいことが先行研究において知られている。例えば母音調和が方言ごとに異なるレト・ロマンス語の例では、アクセント母音-非アクセント母音の長さ比が54%(非アクセント母音の長さがアクセント母音の54%)の方言では母音調和ではなく、非アクセント母音がシュワーに弱化することが報告されている(Delucchi 2016)。本研究ではニヴフ語の2音節語根をアムール川下流域とサハリン島の複数地点で合計20名程度の話者から採録し、現在までに5名分のアクセント母音-非アクセント母音の長さ比を測定した(表1)。

Language	UV-SV ratio
Amur 1 (1946-, F)	73% (17 tokens)
Amur 2 (1935-, F)	54% (41 tokens)
Amur 3 (1939-, F)	70% (34 tokens)
W. Sak. 1 (1942-, M)	67% (13 tokens)
W. Sak. 2 (1946-, F)	90% (39 tokens)

表1. Durational ratio between unstressed vowel (UV) and stressed vowel (SV)

表1が示すように、5名中4名の話者の長さ比が67%から90%に収まっている。これはアクセント依拠母音調和が発生するレト・ロマンス語諸方言のデータと整合する。今後は残りの話者の録音も測定し、データの精度をあげていきたい。

最後に、ニヴフ語における母音調和の歴史的生成過程に重要な示唆を供するデータを採録したことを成果として報告したい。ニヴフ語のアクセント依拠母音調和は高さ調和と認められるが(Hattori 1962, Shiraishi and Botma 2015)、東アジア地域で優勢な母音調和のタイプは舌根調和である(Comrie 1997, 松本2006, Ko, Seongyeon, Andrew Joseph & John Whitman 2014ほか)。一方、ニヴフ語に隣接するツングース・満州諸語には歴史的に舌根調和から高さ調和への変化を遂げた満州語三家子方言のような例がある(Li 1996, Zhang 1996)。その変化の原因にはアクセントの変容が関与していると推測されているが、興味深いのは舌根調和から高さ調和への移行過程を示す中間段階の方言が報告されていることである。これは満州語のように方言・歴史(文献)研究が進んでいる言語ならではの研究成果であるが、そうした中間段階

方言の一例が満州文語である。満州文語では舌根調和を構成する母音の対立ペアが2つにまで減少し、残りは合流(中和)して中立母音化してしまっている(Li 1996、Zhang 1996)。さらにその2つのうちの1ペア「u—U」はそれぞれ軟口蓋子音「k、x、gh」と口蓋垂子音「q、X、Gh」の後ろという環境でしか生起しない。これは口蓋垂と舌根では調音器官が近接しているため、口蓋垂子音の調音運動が舌根母音Uの調音運動を支持しているためと考えられている(同上)。

さてニヴフ語では一般に口蓋垂子音と高母音「i y u」は共起しない。これは管見の限りすべてのニヴフ語方言の記述に認められる極めて一般性の高い共起制限である。ところが本研究の現地調査の過程で、シュミット方言(北方言とも)の話者複数名から口蓋垂子音とuが共起する語例を複数採録した。これは調査者による採録データのみならず、話者が自らキリル文字を使用して表記したニヴフ語テキストにも反映されている。シュミット方言についてはこれまでほとんどデータがなく、先行研究による文法記述も極めて限定的であった。

仮にシュミット方言で口蓋垂子音—uが存在するとすると、満州文語同様、口蓋垂子音の後ろでのみ舌根母音Uが保たれている可能性がある。この母音のフォルマント測定にはまだ至っていないので音声学的な裏付けをとる必要があるが、シュミット方言において口蓋垂子音—Uの存在が認められれば、ニヴフ語が満州諸語同様、舌根調和から高さ調和への歴史的変遷を経た可能性を示唆する。つまりニヴフ語も東アジア地域の他の言語同様、かつては舌根調和を有していたことになる。シュミット方言という辺境方言はニヴフ語母音調和の変遷の中間段階、つまり歴史上のミッシングリンクとして残存している可能性がある。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

- ① 水島 未記、白石 英才、丹菊 逸治、サハリンの植物相および植生から見たニヴフの植物資源利用、北海道博物館研究紀要、2巻、査読なし、2017、1-14
- ② SHIRAISHI, Hidetoshi and Bert Botma、Asymmetric distribution of vowels in Nivkh、*Studia Orientalia*、117巻、査読有、2016、39-46
- ③ 白石 英才、丹菊 逸治、ニヴフ語アムール方言の基礎語彙3、*北方言語研究*、5巻、査読有、2015、215-226
- ④ BOTMA, Bert and Hidetoshi SHIRAISHI、Nivkh palatalization: articulatory causes and perceptual effects、*Phonology*、31巻、査読有、2014、181-207、

DOI: 10.1017/S0952675714000104

- ⑤ 白石 英才、丹菊 逸治、ニヴフ語アムール方言の基礎語彙2、*北方言語研究*、4巻、査読有、2014、173-184

[学会発表](計5件)

- ① SHIRAISHI, Hidetoshi、Miki MIZUSHIMA and Itsuji TANGIKU、Linguistic atlas of northeast Asia、サハリン州博物館 125周年記念国際学会、2016年9月13日
- ② IOSAD, Pavel、SHIRAISHI, Hidetoshi and Bert Botma、Phonetic (non) explanation in historical phonology: Duration, harmony and dissimilation、エジンバラ大学、Edinburgh symposium on historical phonology、2015年12月4日
- ③ SHIRAISHI, Hidetoshi and Bert Botma、Stress-dependent height harmony in Nivkh、マンチェスター大学、Manchester phonology meeting、2015年5月28日
- ④ SHIRAISHI, Hidetoshi、Stress-dependent harmony in Ainu and Nivkh、国立国語研究所、Typology Festa 3、2014年12月13日
- ⑤ SHIRAISHI, Hidetoshi、Asymmetric distribution of vowels in disyllabic words in Nivkh and Ainu、ヘルシンキ大学、HALS workshop 3、2014年5月19日

[図書](計7件)

- ① SHIRAISHI, Hidetoshi and Bert Botma、On the diachronic origin of Nivkh height restrictions、*Sonic Signatures*、査読有、2018年公刊予定(ページ未定)
- ② 白石 英才、ニヴフ語における母音調和の歴史的発展過程、ひろがる北方研究の地平、査読なし、印刷中、105-113ページ
- ③ 丹菊 逸治、ナジェジダ・タンジナ伝承集、査読なし、2017年、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、59ページ
- ④ 白石 英才、水島 未記、オリガ・コヴァン、ニヴフ語音声資料、13号、査読なし、2016年、札幌学院大学総合研究所、104ページ
- ⑤ 白石 英才、ナデジュダ・ベソノヴァ、ニヴフ語音声資料、12号、査読なし、2015年、札幌学院大学総合研究所、90ページ
- ⑥ SHIRAISHI, Hidetoshi and Bert Botma、Writing practices in Nivkh、*Globalising Sociolinguistics*、査読有、2015、209-222ページ
- ⑦ 白石 英才、ゾヤ・リュトヴァ、ニヴフ語音声資料、11号、査読なし、2014年、札幌学院大学総合研究所、86ページ

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

<http://ext-web.edu.sgu.ac.jp/hidetos/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

白石 英才 (SHIRAIISHI, Hidetoshi)

札幌学院大学・経済学部・教授

研究者番号：10405631

(2) 研究分担者

水島 未記 (MIZUSHIMA, Miki)

北海道博物館・研究部・学芸員

研究者番号：70270585

丹菊 逸治 (TANGIKU, Itsuji)

北海道大学・アイヌ・先住民研究センター・准教授

研究者番号：80397009

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：

(4) 研究協力者

マリナ・テミナ (TEMINA, Marina)

ニコラエフスク・ナ・アムール教育大学・講師

ベルツ・ボツマ (BOTMA, Bert)

ライデン大学・言語学センター・准教授